

中国近代に伝わった張廷済の学問

—— 吳大澂に与えた影響 ——

川島尚子

〔抄録〕

清代中期に金石学者として有名であった張廷済（一七六八—一八四八）の著録に『清儀閣所藏古器物文』があるが、私は、この史料をもとに今日まで張廷済の学問、芸術、交友などを考察してきた。その中で、張廷済の金石学研究が、清代末期、近代と金石学者に影響を与え、金石学の発展に貢献したのではないかと考えた。それが分かる史料に、清代末期に金石学者として有名な吳大澂（ご・だいちょう 一八三五—一九〇二）の著録『愨齋集古録』があり、その内容は、『清儀閣所藏古器物文』の編集方法に

則ったもので、自分の収蔵物から手ずから採った拓本、他から入手した拓本の余白に題識、跋を記し編集されている。この頃から、金石学の著録には、張廷済の編集法を用いたものが出てきている。今回は、『清儀閣所藏古器物文』と『愨齋集古録』を中心に取上げ、張廷済が中国近代の金石学に与えた影響を探る一部分として考察していききたい。

キーワード 金石学 清代末期 張廷済 吳大澂

一、はじめに

清代中期に金石学者として活躍した張廷済（一七六八—一八四八）の著録に『清儀閣所藏古器物文』があるが、私は、この史料をもとに今日まで張廷済の学問、芸術、交友などを考察してきた。その中で、張廷済の金石学研究が、清代末期、近代と金石学者に影響を与え、金

石学の発展に貢献したのではないかと考えた。それが分かる史料に、清代末期に金石学者として有名な吳大澂（ご・だいちょう 一八三五—一九〇二）の著録『愨齋集古録』があり、その内容は、『清儀閣所藏古器物文』の編集方法に則ったもので、自分の収蔵物から手ずから採った拓本、他から入手した拓本の余白に題識、跋を記し編集されている。この頃から、金石学の著録には、張廷済の編集法を用いたもの

が出てきている。今回は、『清儀閣所蔵古器物文』と『憲齋集古録』を中心に取り上げ、張廷済が中国近代の金石学に与えた影響を探る一部分として考察していきたい。

『清儀閣所蔵古器物文』がどのような著録であるか、詳しい内容は、拙稿「張廷済と清儀閣・太平寺―現地調査からの考察―」（『京都語文第十七号』二〇一〇年十一月）、「張廷済と古輓の縁」（『京都語文第二十号』二〇一三年十一月）中に説明しているので、ここでは省略する。特徴としては、前に述べた、『清儀閣所蔵古器物文』の編集方法にあるだろう。それは、張廷済が収集した金石器物を手ずから採拓し、その余白に題跋を記しており、器物の歴史、文字の考証、出所、入手経路、買値など、記録した年月日も盛り込まれている。これまでの堅い、冷たい学問の枠から離れ、金石研究を趣味として楽しむという気質を感じる内容である。楽しんでやっていることで読者のことを考え、丁寧な楷書で、なるべく簡潔に分かりやすい跋文がほとんどで、必要に応じて、詳しい力作の跋文も記している。この編集方法が、当時の金石学者に受け、金石学の著録編集に採用されるようになった。そして、後世の金石学者等の研究の手法となっている。

今回のテーマである、張廷済の学問が後世の金石学者に与えた影響を考察する第一歩として、呉大澂著『憲齋集古録』を取り上げることにする。この著は、『清儀閣所蔵古器物文』の編集方法、張廷済の金石研究のやり方が顕著に現れており、呉大澂は、『清儀閣所蔵古器物文』を実際に見て感銘を受け、自らの金石器物の研究に活かしたと考えられる。

二、呉大澂と『憲齋集古録』について

ここで呉大澂とは、どのような人物であったか、『憲齋集古録』とは、どのような著書かを見ていきたい。

呉大澂（ご・だいちよう 一八三五―一九〇二）初名は大淳、同治帝の諱をさけ、大澂と改めた。字は清卿、号は恒軒、憲齋。吳県（現在の江蘇省蘇州市）の人。同治七年（一八六八）の進士。翰林院庶吉士から編修を経て、広東および湖南の巡撫を務め、これからはかなり忙しくなり、次いで河東河道総督となり、兵部尚書の銜たてを加えた。日清戦争が勃発すると統率者として山海関に出勤したが、戦争に敗れて失職し、長年連れ添った陸夫人を失った。郷里に隠居し、中風を病んで没した。金石学に詳しく、鐘鼎彝器に関する古籀文の研究に傑出し、『恒軒所見所蔵吉金録』、『憲齋集古録』の編著に取り組んだ。文字学の方では、説文部首法に従って金文の字形をまとめた、『説文古籀補』、『字説』がある。また、書画を得意とし、金石器物の収蔵にも富んでいた。また、その所蔵した宋徽子鼎の銘文に、「客」の字を「憲」に作るのを取り、憲齋と号した。光緒十一年（一八八五）、朝鮮の京城の変に使いし、吉林の中露の国境に銅柱を建て、篆文の銘を刻した。著書は他に、『憲齋蔵器目』、『古玉図考』、『憲齋先生詩鈔』、『憲齋尺牘』などがある。（二〇九頁 呉大澂肖像）

次に、『憲齋集古録』の内容について述べていこう。失職後、郷里に戻った呉大澂は、『説文古籀補』を増輯し、中風を患って健康はかなり侵されながらも、『憲齋集古録』の完成に努力した。光緒二十二



年（一八九六）六十二歳の時、序文を書き上げ、全二十六冊という大著の編纂に取り組むが、稿本のまま家に蔵せられ、光緒二十八年（一九〇二）六十八歳で病が悪化し、還らぬ人となった。

その後、兄の呉大根の孫の本善と、呉大澂の嗣孫の湖帆が、稿本を整理し、民国七年（一九一八）に商務印書館から発行された。

『愨齋集古録』に収録されている器物の拓本は、中国商（殷）代から漢代までの青銅器の篆籀文が中心である。拓本は、自ら収蔵している青銅器から取ったものと、他から収集したものがあつた。特に、沈樹鏞（しん・じゅよう 一八三二—一八七三）から貰い受けた拓本数十種類を収録している。ここで、沈樹鏞について略歴を記しておく。

沈樹鏞（しん・じゅよう 一八三二—一八七三）字は均初、韻初、号は鄭齋、漢石經室、養花館、川沙（もとは、江蘇省、現在の上海市）の人。咸豐九年（一八五九）の挙人。内閣中書を務めた。金石の考証に優れ、金石書画の収蔵も甚だ富んだ。著書には、『漢石經室金石跋尾』、『書画心賞日録』、『養花館書画目』がある。

これらの拓本中には、張廷済所蔵の旧拓、陳介祺（ちん・かいき 一八一三—一八八四）の旧拓、潘祖蔭（はん・そいん 一八三〇—一八九〇）の旧拓、葉志詒（しょう・しせん 一七七九—一八六三）の旧拓があり、余白に隸書や楷書で題跋を記し、文字の考証をしている。中には、旧蔵者本人の跋や書き入れ、所蔵印があり、呉大澂の考証も

それらを参考しているものもある。『愨齋集古録』と『清儀閣所蔵古器物文』は、ほぼ同一の編集方法である。

三、『愨齋集古録』に収録された張廷済の旧拓

先に述べたように、呉大澂は、張廷済が所蔵していた器物の旧拓を収集し、『愨齋集古録』に収録していた。また、それらの拓本は、『清儀閣所蔵古器物文』全十冊の内、商（殷）代から漢代までの青銅器が収録されている、一冊から三冊までの中にあつた。中には、『愨齋集古録』で、初めて見る張廷済の拓本、直筆の跋もあつた。張廷済は、収蔵していた器物の拓本を何枚か取っており、交友のあつた人に贈り、また、自宅に保存していた。その器物の拓本を、呉大澂が入手し、研究したことが明かになった。ここで、『愨齋集古録』に収録された張廷済の旧拓を取り上げ、全三十五項目に分類し、呉大澂が張廷済の旧拓で、どのような研究をしたか、跋文の注釈を入れながら考察する。

（※『愨齋集古録』は「カク」、『清儀閣所蔵古器物文』は「セイ」、漢数字は、冊数と頁数、Aは頁表、Bは頁裏とする。）

①號叔旅鐘 カク一—一三AB・セイ一—二二AB

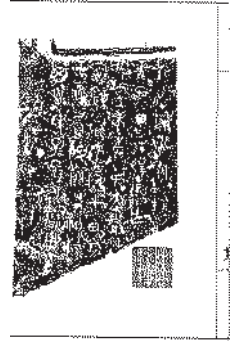
〈題跋〉

號叔旅鐘二（カクシユクリヨシヨウ）張叔未蔵器 カク一—一三B

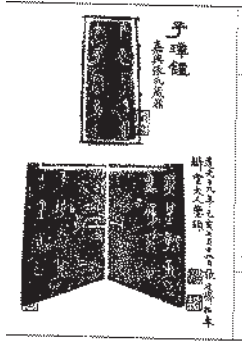
の余白に、張廷済の所蔵印あり。



図①カク一―一三A B



図②カク二―六B



③象形鼎 カク三―二A・セイ一

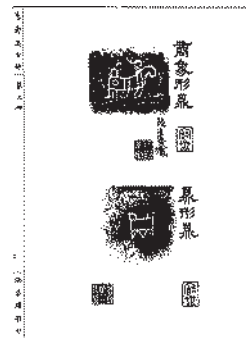
―二五B、二六A

〈題跋〉

商象形鼎 (シヨウシヨウケイテイ)

イ)

張廷済蔵 (張廷済自書)



図③カク三―二A

④父乙鼎 カク三―九B・セイ一

―二五A

〈題跋〉

父乙鼎 (フオツテイ)

廷済蔵 (張廷済自書)

□父



図④カク三―九B

⑤子孫作婦姑鼎 カク五―二B・セイ一―二四A

〈題跋〉

子孫作婦姑鼎 (シソンサクフコ)

テイ)

鼎文曰子孫作不婦姑將鼎彝。孫

作二字為青綠所掩。此圓鼎斌笠耕

觀察有方鼎錢子嘉有顛皆同此文。

(張廷済自書)



図⑤カク五―二B

椒堂大人は、朱為弼(しゆ・いひつ 一七七―一八四〇)のこと。張廷済と同時期に活躍した金石学者で、『憲齋集古録』中の跋に、張廷済が自蔵の器物を拓本に取り、朱為弼に贈っていたことが分かる内容のものがある。短い一文であるが、『清儀閣所蔵古器物文』には、あまり出てこない張廷済と朱為弼の交友が分かる。

⑥ 兮仲敦蓋 カク一〇一七B・セイ一
四三B、四四A

〈題跋〉

兮仲敦蓋 (ケイチュトンガイ)

張氏藏

積同前



兮仲敦蓋 嘉興張氏藏

釋夙翁

図⑥カク一〇一七B

ここでは、兮仲敦の蓋、器九種の拓本が集録されている。文字は、九種とも同じ内容で、一種目に積文が記されている。張廷済旧拓の他に、藩祖蔭（はん・そいん 一八三〇—一八九〇）等の拓本も集録されている。

⑦ 史頌敦 カク一〇一八A・セイ一—三八B

史頌敦

〈題跋〉

史頌敦 (シショウトン) 積同

前嘉興張氏藏器



図⑦カク一〇一八A

⑧ 頌敦蓋文 カク一〇一二B、二三A・セイなし

〈題跋〉

頌敦蓋文 (ショウトンガイブン)

張廷済藏器 (張廷済自書)

此張叔未所藏頌敦後為婦安沈仲復中丞所得。器文為沙土所剝触然文

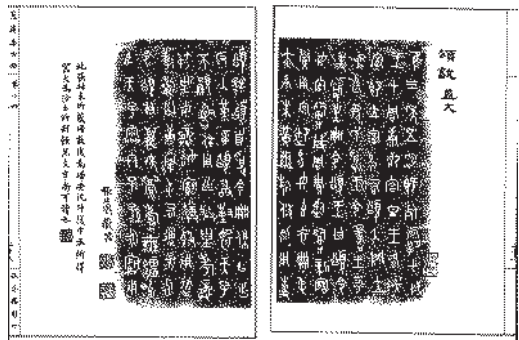
字尚可読也。

この蓋文は、『清儀閣所藏古器物文』には収録されていないが、拓には「張廷済藏器」の自書の題と「張廷済印」「張叔未」の印が押されているので、張廷済が収蔵していた器物であり旧拓に間違いないだろう。余白の呉大澂跋をみると、この頌敦は張廷済の収蔵物で、後に沈秉成（しん・へいせい 一八二三—一八九五）に渡ったとある。ここで、沈秉成について説明する。

図⑧カク一〇一二B、二三A

沈秉成（一八二三—一八九五）原名は秉輝、字は仲復、号は耦園（ぐうえん）、鏢研廬（ちようけんろ）、聴櫓楼（ちようろうろう）。浙江帰安（現在の浙江省湖州市）の人。咸豊六年（一八五六）の進士。安徽（安徽省）の巡撫、両江総督を務め、広西（広西省）の巡撫の時には、民に養蚕を教えた。皖（カン）現在の安徽省潜山県の巡撫の時には、河川整備を行った。また、経古書院を建て、金石器物を収蔵し、字画を楽しんだ。

呉大澂と沈秉成の詳しい交友を知る跋は記されていないが、同時期の人物であり、金石を通して交友があったと考えられる。この張廷済の旧拓も沈秉成が収蔵していたものであろうか。



⑨ 頌敦器文 カク一〇―二三B、二四A・セイなし
〈題跋〉

頌敦器文(シヨウトンキブン)
文為沙土触損 張廷済蔵器
(張廷済自書)

この拓は『清儀閣所蔵古器物
自書』に収録されておらず、張廷済
自書の跋、印があり、張廷済旧拓
で間違いないだろう。二四Aの拓
本の余白に押されている二つの収
蔵印は、「恣齋」の呉大澂のもの
と、「椒堂審定」とあり、朱為弼
のものとなる。張廷済は朱為弼に
拓本を贈り、鑑定してもらったこ
と、その後、呉大澂に渡って来た
ことが分かる。

⑩ 艾伯敦 カク十一―十四B、セイ―三七B (※題は漢字が無い
め『清儀閣所蔵古器物文』による)

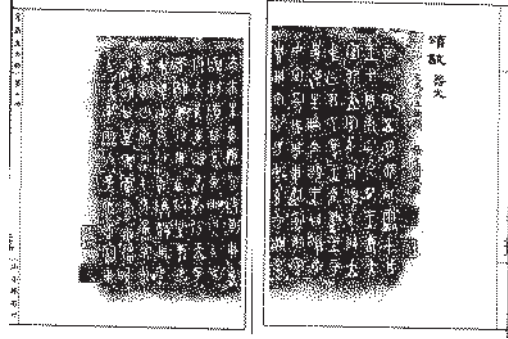


〈題跋〉□敦

椒堂大人鑑録 張廷済蔵物 (張廷済
自書)

この拓に押されている印は、張廷済の
「張叔未」、朱為弼の「椒堂審定」、呉
大澂の「恣齋」の三種。これも跋にあ

図⑩カク十一―十四B



図⑨カク一〇―二三B、二四A

るように、張廷済から朱為弼に贈られ、鑑定し、後に呉大澂に渡った
ことが分かる。

『清儀閣所蔵古器物文』にも同じ拓が収録されているが、朱為弼と
の関係については記されていないので、この拓で明らかになったこと
である。

⑪ 御方尊蓋 カク一三一―三三A B・セイなし

〈題跋〉御方尊蓋 癸未王在圃觀亭王賞御貝用作父癸宝尊。

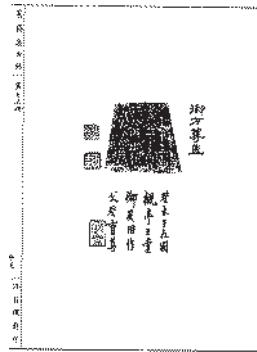
〈銘文〉圃圃田予州藪岬觀省觀亭遊觀之亭廝(商)本商賈字誦為賞。
御从イ从卸作者名。道光乙未(一五年 一八三五)夏日 嘉興徐
同柏。

この拓には、張廷済の印「張廷済印」、「張叔未」があり、張廷済の
甥、徐同柏(じょ・どうはく 一七七五―一八五四)が刻した銘文の
拓本も収録している。『清儀閣所蔵古器物文』には無い拓本だが、張
廷済の印があることから、張廷済所蔵の器物であることが分かる。こ
こで、徐同柏について説明しておこう。

徐同柏(じょ・どうはく 一七七五―一八五四)嘉興(現在の浙江
省嘉興市)の人。原名は大椿、字は寿蔵(じゅぞう)、号は籀莊(ち
ゅうそう)。張廷済の住まい清儀閣のある新篁里(シンコウリ 現在
の浙江省嘉興市新篁鎮)に暮らし、張廷済から指授され六書篆籀を研
究し、多くの古文字を知り、詩や篆刻に長けた。張廷済が古器を得る
と、必ず徐同柏と考証した。また、張廷済の所用印は徐同柏が刻すこ
とが多かった。

『清儀閣所蔵古器物文』内の古器物の文字の考証は、徐同柏が記し

ているものが多い。この徐同柏の銘文は、御方尊蓋の文字に関するこ
とで、石に文を刻し、拓本を取っている。



図⑪カク一三一―一三A B

⑫母父丁尊 カク十三―二十B・セイ一―一九

〈題跋〉

母父丁尊（ボフテイソン） 張叔末蔵器

母父丁



図⑫カク十三―二十B

⑬伯考簋蓋 カク一五―二一A・セイ一―四五A

〈題跋〉

伯考□簋蓋（ハクコウキガイ）（※該

当漢字なしの部分に□にする）

伯考□鑄旅簋永其萬年子孫宝用。



伯考鑄旅簋永
其萬年子孫宝用

図⑬カク一五―二一A

この拓本には、張廷済の印「張叔末」、「廷済」の二種と呉大澂の印
「憲齋」の一種がある。また、呉大澂自書で、古文の釈文が余白に記
されている。『清儀閣所蔵古器物文』には、拓本都共に、張廷済と徐
同柏が考証内容や入手経路などを記している。

⑭史頌盤 カク十六―十二A・セイ一―四七B

史頌盤

〈題跋〉史頌盤（シシヨウバン）

此盤同里王氏旧物。椒堂大人曾書宝盤
齋扁余售歸於余リ昔有頌敦。史頌敦合此
因以三頌名吾齋。張廷済（張廷済自書）

史頌作盤其萬年子孫孫永宝用。（呉

大澂自書）



史頌作盤
張叔末自書

図⑭カク十六―十二A

この拓本には、張廷済の印「張廷済印」、「張叔末」二種と朱為弼の
印「椒堂審定」一種、呉大澂の印「憲齋」一種があり、張廷済が拓本
の余白にこの器物の出所を記し、朱為弼も器物について鑑定し、後に
呉大澂に渡ったことがわかる。

⑮伯躬鬲 カク十七―十二A・セイ一―四六A

（※該当漢字なしの部分
は□にする）

〈題跋〉伯□父鬲（ハク□フレキ）

伯□父作畢姬尊鬲其萬年子孫孫永

宝用。



図⑮カク十七―十二A

叔末張廷済蔵器拓奉椒堂大人著録。（張廷済自書）

⑩番君鬮 カク一七一―一二B・セイ一―四七A

〈題跋〉

番君鬮 (バンクンレキ)

廷済蔵器 (張廷済自書)

□番君□伯自作鬮其萬年無疆予孫永用。この拓本には、余白に張廷済自書の名と印「張叔未」、呉大澂の印「憲齋」がある。



図⑩カク一七一―一二B

⑪冊ノ陸父庚貞 カク十九―二一A・セイなし

〈題跋〉

冊陸父庚貞(サクサクリクフコウユウ)

張廷済蔵器拓奉椒堂大人。(張廷済自書)



図⑪カク十九―二一

拓本の余白に張廷済の跋、印「張叔未」、呉大澂の印「憲齋」あり、『清儀閣所蔵古器物文』には、収録されていない器物の拓本である。

⑫父癸觶 カク二十一―五B・セイ一―十一A

父癸觶 嘉興張氏蔵器

〈題跋〉父癸觶(フキシ)

申即神父癸觶 廷済(張廷済自書)



図⑫カク二十一―五B

⑬冊リ乙觶 カク二〇―一B・セイ一―三二B

冊乙觶

嘉興張氏清儀閣蔵器

〈題跋〉冊乙觶(サクサクイツシ)

嘉興張氏清儀閣蔵器

冊冊乙

⑭父戊觶 カク二〇―一B

父戊觶

嘉興張氏蔵器

書の名、「張叔未」の印がある。

拓本の余白に「廷済」の張廷済自

書の名、「張叔未」の印がある。

⑮父癸觶 カク二〇―一四A・セイ一―三二A

父癸觶

嘉興張氏蔵器

張叔未蔵(張廷済自書)

張氏蔵器

朕作文癸尊彝

⑯威觶 カク二〇―一五B・セイなし(※徐同伯跋あり)

威觶

平安館蔵器

徐籀莊积作威

題跋にある「平安館」の号、「葉氏所蔵」の印「葉氏」とは、葉志



図⑮カク二〇―一四A

図⑯カク二〇―一五B

図⑰カク二〇―一四A

図⑱カク二〇―一四A

読（しょう・しせん 一七七九—一八六三）のこと。『憲齋集古録』中には、葉志読の旧拓が収録されている。徐同伯が戚の文字の釈文を作ったと記されており、張廷済、徐同伯、葉志読との交友が見て取れる。ここで、葉志読について説明しておく。



葉志読（しょう・しせん 一七七九—一八六三）字は東卿、号は平安館、漢陽（現在の湖北省武漢市漢陽区）の人。兵部武選司郎中を務めた。

図22 カク二〇—一五B

学問に精通し、金石を好み、書画に長じていた。金石器物の収蔵に富み、それは両湖の冠といわれた。

②3 孫祖乙觚 カク二—四A・セイ—一B
 題跋 孫祖乙觚（ソソソオツコ） 嘉興張氏蔵 孫且乙 廷済（張廷済自書）



図23 カク二—四A

②4 子孫父戊觚 カク二—七A・一—一〇A



題跋 子孫父戊觚（シソソフボコ） 嘉興張氏蔵器 子孫父戊 廷済（張廷済自書） 余白に「張叔未」、「憲齋」の印あり。

図24 カク二—一七A

②5 婦醒觚 カク二—九A・セイ—一三三A
 題跋 婦醒觚（フジンコ） 嘉興張氏蔵

婦醒作彝 亜形立戈形足跡形。 廷済（張廷済自書）
 婦醒作彝 亜形中立戈形足跡形。 廷済（張廷済自書）

余白に「張叔未」、「憲齋」の印あり。

②6 諸女角 カク二—一八B・一—二七A・三二B
 題跋 諸女角（シヨジョカク） 張廷済蔵器 拓奉椒堂大人。（張廷済自書）

諸女角

亜形中架上三矢形諸女□大、尊酒形 箕形 子尊司彝。

余白に「張叔未」、「椒堂審定」、「憲齋」の印あり。

②7 父癸爵 カク二—一六B・セイなし

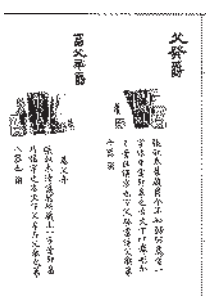


図27 28 カク二—一六B

題跋 父癸爵（フキシヤク） 張叔未旧蔵爵今不知帰何処首一字作□当即享之古文下以拳形加□旁非爵字也下父癸当係父廟第十器。 大激印 廷済（張廷済自書） 拓本の余白に「張叔未」、「憲齋」の印あり。



図26 カク二—一八B



図25 カク二—九A

⑳ 冨父辛爵 カク二二一六B・一四A

〈題跋〉 冨父辛爵 (フクフシンシヤク) 冨父辛

張叔未清儀閣所蔵上一字当即冨乃福字之省文下父辛乃父廟之第八器

也。 **大激印**

延済 (張廷済自書)

拓本の余白に「張叔未」、「憲齋」の印あり。

㉑ 父辛爵 カク二二一十A・セイ一六

〈題跋〉 父辛爵 (フシンシヤク) 父辛

張叔未所蔵父辛爵今不知在何処。

大激印

延済 (張廷済自書)

拓本の余白に「張叔未」、「憲齋」の

印あり。

㉒ 父丁爵 カク二二一〇A・セイなし

〈題跋〉 父丁爵 (フテイシヤク) 父丁

張叔未所蔵父丁爵以上二爵皆拠旧拓本編入。

拓本の余白に「張廷済印」、「憲齋」の印あり。

㉓ 挙癸爵 カク二三一四B・一三A

〈題跋〉 挙癸爵 (キョキシヤク) 挙癸爵

張叔未蔵爵拠清儀閣旧拓本編入。

大激印

拓本の余白に「張叔未」、「憲齋」の印あり。

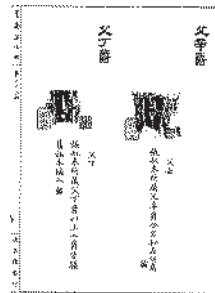


図 ㉑ ㉒ カク二二一十A

㉔ 綏和壺 カク二五一五B・セイなし

〈題跋〉 綏和壺 (スイワコ)

綏和六年造壺容□□重六斤八兩

第二 延済 (張廷済自書)

拓本の余白に「張叔未」、「憲齋」

の印あり。

㉕ 置鼎 カク二六一〇B・セイ二一六A

〈題跋〉 置鼎 (チテイ)

第六置恫一容一斗五升重十二斤

蓋通。

此器失蓋已残破 張廷済蔵拓奉

椒堂大人著録 (跋文三種とも張廷

済自書)

拓本の余白に「張叔未」、「憲齋」の印あり。

㉖ 大泉五十范 カク二六一七B・セイなし

〈題跋〉 大泉五十范 (ダイセンゴジュウハン)

〈銘文〉 古泉銅範凹文少此雖得半亦足宝葉東卿与劉燕庭皆有凹文全模

形余蔵泉範十有五凹者缺馬今乃補不求凸并不求全虚中守残宜長年

光二十年庚子七月一日 七十二歳老耆張廷済叔未甫。

拓本の余白に「憲齋」の印あり。

㉗ 大泉五十范 カク二六一八B・セイなし

〈題跋〉 大泉五十范 (ダイセンゴジュウハン)

〈銘文〉 新室泉母識大泉沙画泥印凹文凹武林戴公窮蓋堅有子官高囊無

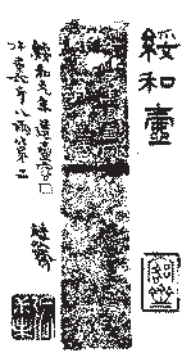


図 ㉔ カク二五一五B



図 ㉕ カク二六一〇B

錢選一大錢猶不全張老廷濟亦窮酸。 道光庚子二十年作銘付其姪辛鏞
主寶拍手春風顛。 叔末。

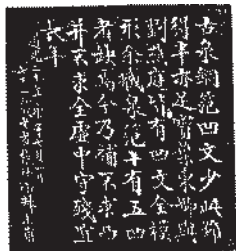
③④・③⑤の「大泉五十范」の拓本は、『清儀閣所藏古器物文』にはないが、セイ三―十二Bく十六Bに渡って「漢大泉五十范」という題で、拓本と跋が収録されている。

図上③④カク二六一―一七B、下③⑤カク二六一―一八B

大泉五十范



大泉五十范



四、おわりに

『窓齋集古録』と『清儀閣所藏古器物文』を見ていくことで、呉大激が張廷済の旧拓を収集し、この著の編集方法も張廷済のやり方に則って編集していったことが明らかになった。これは、張廷済が呉大激に与えた大きな影響である。多くの金石学関係の著録の中でも、このよ

うな、学問を楽しむもうとする趣向が分かる著書は、誰が読んでも楽しく、分かりやすくなっている。張廷済に続き、呉大激が遺した金石学は、羅振玉（一八六六―一九四〇）や後世の金石学者にも影響を与え、金石学の発展につながっている。今後、さらに研究を深めていく必要があるが、他の中国近代に出版された、張廷済の研究方法を取り入れた著書を研究し、将来的に現代にまで、どのような影響と発展をしてきたのかを考察していきたい。

〔参考文献〕

- ①『窓齋集古録』全二十六冊（附積文冊） 呉大徵著 昭和五十一年七月 書学院出版部
- ②『清儀閣所藏古器物文』十冊 清・張廷済撰 民国十四年 上海商務印書館 桐郷徐氏愛日館藏本景印
- ③中国書論大系第十八巻・清八 一九九二年一月 編集集中田勇次郎 二玄社
- ④拙稿「張廷済と清儀閣・太平寺―現地調査からの考察―」 佛教大学 国語国文学会『京都語文第十七号』 二〇一一年一月
- ⑤拙稿「張廷済と古甌の縁」 佛教大学 国語国文学会『京都語文第二十号』 二〇一三年十一月

（かわしま なおこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学）

（指導教員・長尾 秀則 教授）

二〇一四年九月三十日受理